



尾道商業會議所記念館

第47回企画展示

郷土玩具大合戦 東軍 vs 西軍

2024 (令和6) 年10月25日 (金) ~ 2025 (令和7) 年2月26日 (水)

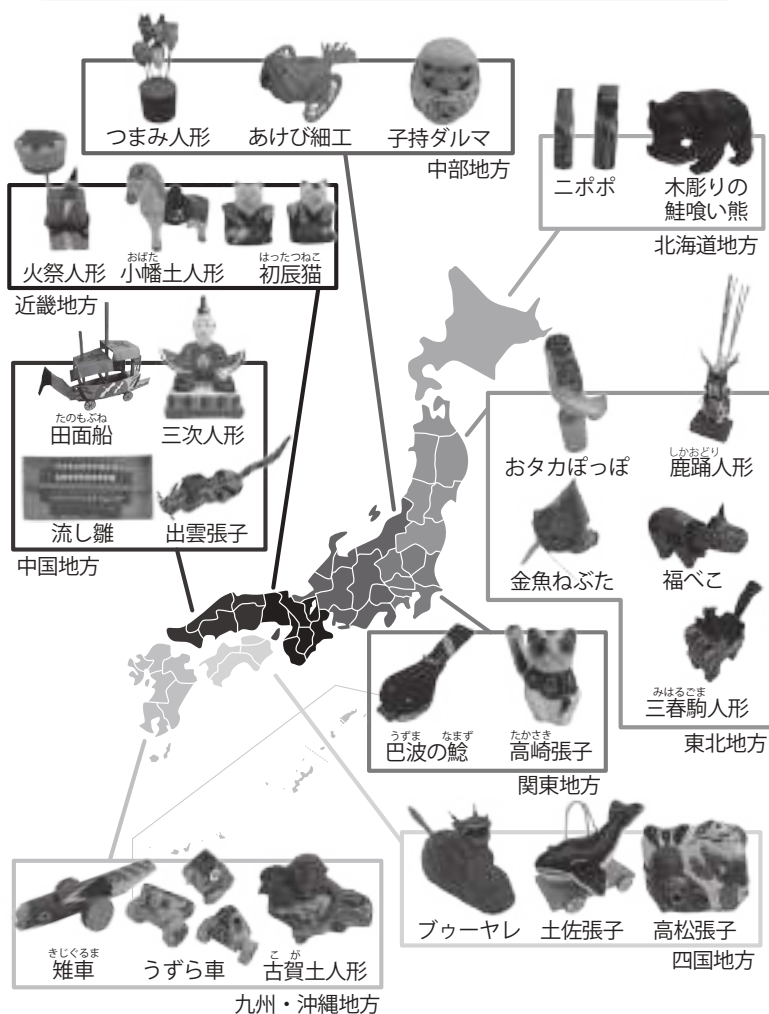
展示解説

郷土玩具とは、江戸時代後期から明治時代にかけて、子どもたちの健やかな成長を願う気持ちを込めて、全国各地で作られたおもちゃです。地域の産物である紙や木、竹、土などを使い、郷土の伝説や信仰を反映して、その土地の風土や暮らしの中から数々の素朴で可愛い郷土玩具が生まれました。

こうした郷土玩具は、大人が子どもに作って与えたり、大人と子どもが一緒になって作ったものでしたから、子どもばかりでなく、大人たちからもその素朴な造形美や郷愁を感じられる姿に関心が集まり、収集家たちの心をとらえました。

大人たちの郷土玩具への関心は、長く続いた戦乱の世が終わり、太平の世が訪れた江戸時代に盛んになって社会の表面に現れるようになりました。それまで個人で作っていたものが、金銭で買い求めることができる商品となって市場にも登場するようになったのです。

全国郷土玩具地図



(展示品より抜粋)

商業が盛んな商都として古くから知られる尾道ですが、石工や鍛冶、木工の職人によるものづくりは、「商人のまち」だけでなく、「職人のまち」としての歴史を併せ持っています。

木工の職人街の一つを形成した杓屋小路(柄杓など木工細工の職人が集住したエリアで、小路は別に叶小路とも呼ばれた)から田面船、三体みこしの玩具は生まれました。また、その職人街とは別に、田面人形やベッチャー面など様々な郷土玩具が誕生し、子どもたちに親しまれてきました。

さて、本展では大人から子供まで広い世代から愛された全国の郷土玩具を概観いただくと共に、さながら関ヶ原の戦いの東軍(東日本)と西軍(西日本)のように東西郷土玩具対決を行いたいと思います。



田面船

<参考文献> 『民俗民芸双集46 日本のおもちゃ』(岩波美術社、1969年)



東日本の郷土玩具は、主に寒冷な気候や自然環境を背景に、素朴で力強いデザインや、豊作や健康を祈るための魔除け的な意味を持つものが多く見られます。

※【 】は本展で展示した郷土玩具

■ 北海道・東北地方

北海道に代表されるお馴染みの【木彫りの鮭喰い熊】や網走市の【ニボポ】などの木製玩具、東北地方の木地師（ろくろと呼ばれる特殊な工具を使用して盆や椀などを作る職人）が作る【こけし】や鷹を模した【おタカぽっぽ】などの木地玩具、花巻人形・【堤人形】・【相良人形】に代表される土人形、竹や木などで組んだ枠に紙などを貼り付けて形作る張子玩具（【福べこ】【赤べこ】【犬】【だるま】）など、雪深い地域ならではの温かみのある玩具が数多く見られます。

また、祭礼や民俗芸能にちなんだ玩具（【金魚ねぶた】【鹿踊人形】）や馬の産地であった地域にふさわしい、日本三駒などと呼ばれる八幡馬、木下駒、【三春駒】など馬を題材にした玩具も特徴的です。

■ 関東地方

犬張子や今戸土人形、弾き猿や暫狐、千木宮など江戸時代の文化を受け継ぐ様々な玩具が作られてきました。

全国でも有数の養蚕地帯であった群馬県高崎市豊岡町で縁起物として作られた群馬県の【高崎張子】をはじめ、埼玉県船渡張子や練物人形、千葉県芝原土人形などは江戸時代後期の伝統を受け継ぐ玩具として知られています。

巴波川の水が氾濫したとき大鯰の大群が人々を救ったことを由来とする栃木県の【巴波の鯰】、幕末から明治初期にかけての横浜開港の様子を表わした土人形【開港人形】などユニークな姿をした玩具も見られます。

■ 中部地方

雪のように真っ白い山梨県の【子持ダルマ】や石川県の八幡起きあがり、白目のままで作られ誓願成就の際に目を入れる愛知県の【三河だるま】をはじめとするこの地域ならではの姿をしたダルマの数々が特徴的です。

日本海の荒波を越えてたどり着く佐渡島には、江戸から伝えられたという芝居の人形【のろま人形】や、これを玩具化した【つまみ人形】が伝えられており、明治時代の作家・尾崎紅葉にその良さを見出されたというエピソードがあります。

また、山間部に目をやると、長野県の【あけび細工】や【藁馬】など、山国の風情が感じられる玩具に出会うこともできます。



西日本の郷土玩具は、温暖な気候と豊かな自然、また歴史的に文化や貿易が盛んであった影響を受けた多彩なデザインがあります。精巧な細工や色彩豊かなものが多く、装飾性が高い点が特徴です。

■ 近畿地方

京都の伏見土人形やその影響を受けて作られた滋賀県の【小幡土人形】、大阪府の住吉土人形、兵庫県の稲畑土人形など長い歴史を持つ玩具が伝えられています。

また、祭礼に結びつく玩具として、熊野那智大社で行われる例大祭・那智の火祭りをモチーフにした【火祭人形】や、「はったつさん」の愛称で親しまれる住吉大社の【初辰猫】があります。

■ 中国・四国地方

尾道市の【田面船】や三体みこしをはじめとし、中国地方には風格のある玩具が多く伝わっています。中国地方の一部では、桃の節句に飾る天神人形が作られており、本展で展示する広島県三次市の【三次人形】が天神の姿をしています。

また、鳥取県には全国的にも有名な【流し雛】、島根県には首を振揺り動かす【出雲張子】があります。

四国には、【高松張子】や【土佐張子】、祭礼に登場する牛鬼を模した【ブーヤレ】、土佐伝統の漁業・捕鯨と結びついた【鯨車】などが見られます。暖かい風土が育んだ優しい造形が特徴です。

■ 九州・沖縄地方

江戸時代唯一の開港地である長崎県の風土を伝えるエキゾチックなモチーフと豊かな色彩美を持った【古賀土人形】、博多人形の伝統を伝える古博多土人形や弓野土人形など、色彩豊かな土人形が特徴的です。

また、九州各地で作られた【雉車】【うずら車】は車輪と紐をつけて引っ張って歩くもので、この地方の代表的な木製玩具です。

沖縄を代表する琉球張子なども含め、この地方の郷土玩具は南国らしく、明るい色彩が特徴です。

〈参考資料〉

『日本郷土玩具』（金星堂、1934年）

『郷土玩具のふるさと』（山と溪谷社、1962年）

『日本の郷土玩具』（未来社、1962年）

『民俗民芸双書46 日本のおもちゃ』（岩崎美術社、1969年）

日本玩具博物館ホームページ（2024年9月閲覧）

宇土張子とは、熊本県宇土市で作られていた張子玩具のことです。宇土張子には板の台座に車つきの首振り虎が乗せられている虎車、正月に売られる縁起物の女だるまの「おきなこぼし」、五月節供に武者人形とともに飾られる相撲取りなどがあります。

宇土と尾道には張子玩具を通して深い関わりがあることが伝えられています。尾道から旅をして宇土へやってきた老夫婦が宇土で倒れ、老夫婦を助けた家にお礼として張子の作り方を教え、それが宇土張子のはじまりと伝えられています。また別の説では老夫婦を張子の師匠として宇土に呼び寄せたとも伝えられています。時期は江戸時代とも明治20（1887）年代頃とも言われています。

しかしながら、これらの言い伝えに対して、近年まで尾道で張子玩具が作られていたということは知られていませんでした。しかし本展のパネル「郷土玩具蒐集の世界」の中でご紹介している保田素一郎氏の著書『山陽郷土玩具考』（朝日書房、1935年）には、廃絶した尾道玩具として、「尾道張子（首振虎）」と記載されており、確かに存在した事が分かります。

このような中、平成29（2017）年7月15日～8月19日にかけて行われた『尾道学ミュージアム「郷土玩具 再会・再生」展』（尾道学研究会・尾道市文化振興課主催）開催のタイミングに合わせて、尾道張子（首振虎）がネットオークションに出品され、その現物が確認されると共に、展示関係者の手によって落札されて、まさに里帰りとなる尾道での展示機会となりました。

ちなみに熊本の宇土張子に見る首振虎は、台車の上に乗っているのが特色です。

〈参考資料〉

『山陽郷土玩具考』（朝日書房、1935年）

『尾道学研究会雑誌』（尾道学研究会、2018年）



尾道張子（首振虎）

江戸時代、「てあそびもの」と呼ばれて家々で楽しまれていたおもちゃ類への関心が高まり、製品として市場に流通して人々の関心を集めはじめました。江戸時代中期には、城下町を中心に都市文化が栄え、町の周辺にある村々はそれに取り残されていきましたが、都市に住む市民の間では地方に残る郷土玩具などの古い伝統に関心を与える機運が高まりました。

明治時代に入ると、明治政府の近代化政策（明治維新）によって、開港場（外国との貿易に使用される港）や都市部を中心に生活様式の洋風化がすすめられていく中、郷土玩具をはじめとする日本国内の伝統や風習が失われていくかに見えました。

しかし、欧米文化への憧れの反動かのように日本古来の習俗への郷愁の念が再燃します。その発端となったのは、明治24（1891）年、郷土玩具（この頃は「諸国玩具」「地方玩具」とも呼ばれた）に刊行された、郷土玩具収集趣味を紹介した画集『うなみの友』（玩具収集愛好趣味を最初に紹介した。全十巻。「うなむ」とは子どものことで、「うなみの友」とはおもちゃのこと）の存在です。

著者は郷土玩具収集愛好運動の草分け的役割を果たした清水晴風で、さらに、明治42（1909）年には、清水をはじめとする人形玩具を愛好するメンバーによって「大供会」が結成されました。同会は、人形玩具に関する知識の交換や年1回の展覧会を開催し、会員が所蔵する人形を持ち寄って競い合い、明治・大正時代の人形愛好運動を推進しました。

「大供会」の「大供（大人）」とは「小供（子ども）」に対する語で、大の大人が「小供」専用のおもちゃに興味を持ったり、それを集めて喜んだりする行為への社会的な照れくささと、ひそやかな懐古趣味が同居した言葉で、明治時代の趣味人たちの心境をよく表しています。

また、明治時代には海外からブリキやゴムなどの新素材を使用した近代玩具が輸入され、江戸時代以来の郷土玩具は子どもたちの手から離れてゆき、大人たちの趣味対象へ次第に移行していきました。

その当時、郷土玩具は「大供玩具」という呼ばれ方が一般化し、一部「土俗玩具」という新しい呼び方も生まれました。「土俗」という呼び方は、明治時代に海外からもたらされた人類学の中で「民間伝承」を土俗と呼んだことに由来し、当時、各地の伝統的な郷土玩具が土俗学の一資料として生かされる機運が見られました。

その後、明治40（1907）年代から民俗学の開拓者である柳田國男により、民俗的資料採集調査を目的とする郷土学研究がすすめられ、「郷土玩具」という新たな呼び名が定着しました。

尾道にも郷土玩具に魅せられて全国各地の玩具を収集し、その世界を探究した人々がいます。

ひとりは 保田素一郎^{やすだ そいちろう}氏です。尾道市文化財保護委員をはじめ、尾道市社会教育委員、尾道市郷土美術館運営委員（副委員長）、日本郷土玩具の会地方理事、県郵趣連盟理事長（郵趣とは切手やはがきなどの郵便物収集の趣味のこと）、市文化財協会副会長、日本考古民俗学会会員を歴任するとともに、『山陽郷土玩具考』（朝日書房、昭和10年）、文芸同人『田面船』（昭和23～24年）、『広島県郷土玩具』（広島県文化財協会、昭和38年）などを出版されました。これらの文化振興活動と同時に数々の郷土玩具を収集したコレクターでもありました。

もうひとりは山崎一^{やまざき はじめ}氏です。戦前は尾道ゆかりの小説家・林芙美子^{ふみこ}が通ったことでも知られる広島県尾道高等女学校（現在の尾道東高等学校）の数学教師を務められ、戦後は市内の中学校で教壇に立ち、最後は吉和中学校に教頭先生として在籍されました。

戦後に収集したと思われる北海道から鹿児島までの郷土玩具や民芸品のコレクションにはじまり、郵趣、広告のマッチラベル、タバコやお菓子の空き箱、葉の包装紙などのコレクターであり、特に本展示のテーマである郷土玩具の中には既に廃絶して入手困難なものも含まれており、大変貴重な資料といえます。



保田素一郎氏の蔵書より（尾道市教育委員会蔵）
保田氏の著作と共に、郷土玩具愛好家達による会誌も見える。

ベッチャー面～尾道の郷土玩具より～

ジキチン、ベッチャー、ジキチン、ベッチャー…急調子^{きゅうちょうし}の囃子太鼓^{はやし}にのって、鬼たち^{おに}を囃し立て、泣き笑う子ども達の歓声に沸き立つ一宮^{いっきゅう}さんのベッチャー（吉備津彦神社、通称・一宮神社の例祭）は、尾道の秋を代表する風物詩として名高い祭礼です。

子ども達にとってベッチャーは恐ろしくもあり、また、ヒーローの様にカッコ良く映るものでもあります。面をかぶってみたいという子ども達の憧れを実現してくれるのが、ベッチャー面を模した張り子面です。ベタ、ソバ、ショーキー、獅子頭^{ししがしら}がセットで、大・中・小のサイズがあり、小は幼児向けサイズといった感じで、作りも素朴^か且つ簡素なものです、大になるとより精巧^{せいこう}になり、玩

具というよりも飾り面的な質になっています。獅子頭は、伊勢を始め各地の郷土玩具・民芸品の内によく見るものと同一形態で、紐を手繰って口が開閉するようになっていきます。

面と共にベッチャーには欠かせない小道具として、ベタとソバが持つ祝棒^{いわいぼう}とショーキーが持つササラ竹があり、こちらも張り子面と並んで祭の日に売られていました。祝棒には太く装飾が派手な特製と、細く簡単な作りの並製の2種類がありました。

何れも、故橋高誠^{きつたかまこと}氏の手によって伝えられたもので、橋高氏が彫られた木型の上に、紙を幾重^{いくえ}にも重ねて形状が象^{かたど}られ、最後に彩色^{いろどり}、植毛^{はつきよう}を施して仕上げられ、紙製とはいえどなかなか頑強な作りになっています。

祭当日、ベッチャーの一行と共に移動式の屋台でベッチャー面が売られる光景が平成の半ば頃まで見られましたが、現在では見られなくなって久しく、忘れられつつあります。

一般的に出回ったこの張り子面とは別に、より忠実に作られた木彫面^{きぼりめん}も存在し、こちらは希望者の需要に応じて橋高氏が特注で製作されたものと見られます。

尾道本通り商店街（本町センター街）に常設されている一宮神社の御旅所^{おたびしょ}には、橋高氏によって同社へ奉納された木彫面の一つ（3面1セット）が展示されています。

ベッチャー木彫面
（左：ソバ 中：ベタ 右：ショーキー）



（杉原薬局蔵）



（手作りアイスクリームの店「からさわ」蔵）

祝棒、ササラ竹



（手作りアイスクリームの店「からさわ」蔵）